

# 教員の賞賛行動に対するフィードバックの効果の検討

特別支援学校の教員を対象にした予備的研究

The effects of feedback on the teacher's praise at a special needs school

土田菜穂・中鹿直樹

Naho Tsuchida, Naoki Nakashika

立命館大学 総合心理学部

College of Comprehensive Psychology Ritsumeikan University

Key words : 賞賛行動, フィードバック, ビデオモニタリング

## I. 問題と目的

学校場面において、指導者からの賞賛が児童生徒のパフォーマンス向上に効果があることは多くの研究で明らかになっている(たとえば, Van Acker, Grant, & Henry, 1996)。指導者の賞賛行動を促進する手続きとして、パフォーマンス・フィードバックやセルフモニタリングなどが挙げられる(Hawkins, & Heflin, 2011)。しかし、特別支援学校に焦点を当て、その現場の教員に対する効果的な手続きを検討した研究は少ない。

本研究の目的は、特別支援学校の教員に対する賞賛行動を促進させるための予備的研究として、他者からのフィードバックと教員自身のビデオモニタリングを併用した手続きの効果を検討することである。

## II. 方法

参加者：特別支援学校に勤務する女性教諭1名であった(以下、教員Aとする)。教員Aは、高等部の担任であり、特別支援学校での勤務歴は5年以上であった。

従属変数：教員Aの賞賛行動の回数とした。賞賛行動の定義は、子どもの行動に対してポジティブな評価をすること(言葉かけやジェスチャー等)とした。

設定：本研究は、教員Aが担当するクラス(高等部)の「クラススタディ」で実施した。参加メンバーが固定されており、教員Aがメンバーそれぞれとやりとりのある場面のため、この時間を選んだ。特に、月曜の朝のクラススタディの15分間程度を設定場面とした。この時間の内容は、飼育しているカブトムシやクワガタの観察とお世話であった。

手続き：はじめに、研究の概要を教員Aに説明して、賞賛行動に関して測定することを伝えた。測定は、ビデオ録画した映像を視聴する方法で実施した。ベースラインは、測定のみ実施した。介入1の前に、賞賛行動の定義を確認し、ベースラインの賞賛行動の回数と内容(どんなときにどんな行動に対してどんな賞賛を実施したか)を教員Aに報告した。介入1は、第1筆者が毎回映像を視聴して、賞賛行動の回数と内容を教員Aに報告した。介入2の前に、ビデオモニタリングの練習を実施した。介入2は、教員Aが自分で録画した映像を視聴して賞賛行

動の回数を数え、第1筆者に報告した。第1筆者はその数値を図表にして教員Aに提示した。介入2のあと、教員Aと第1筆者とで振り返りを実施した。

## III. 結果

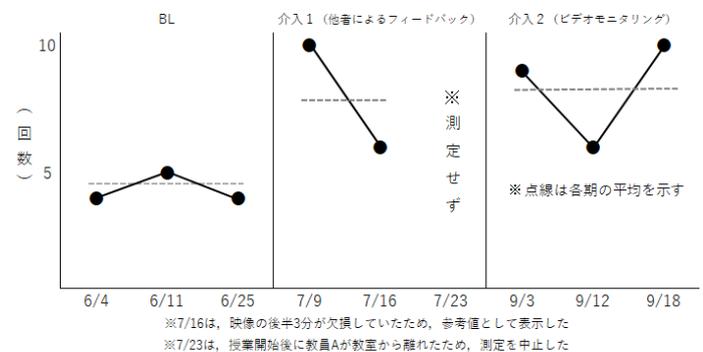


図1 教員Aの賞賛行動の回数

図1に、教員Aの賞賛行動の回数を示した。ベースラインの平均は4.3回、介入1は平均8回、介入2は平均8.3回だった。また、介入1は2日目の映像の一部欠損や3日目の教員の不在のため測定の回数は少なかった。振り返りで教員Aより「ビデオモニタリングによって、自分の褒めた場面の確認やこんな場面でも褒めることができるかもという気づきがあった」と報告があった。

## IV. 考察

図1の結果より、介入1で賞賛行動の回数が増加し、介入2において賞賛行動の回数が維持された。よって、他者からのフィードバックとビデオモニタリングの手続きは賞賛行動の促進に効果があったといえる。

介入1は、他者からのフィードバックによって、賞賛行動の具体的な数値とエピソードを確認したことで次の試行時の賞賛行動の目安となり、増加につながったと考えられる。介入2は、ビデオモニタリングによって、実施した賞賛行動を本人が確認するとともに、新たな賞賛行動の機会を見つけることが可能となり、賞賛行動の維持につながったと考えられる。

今後の課題については、介入終了後に教員の賞賛行動がどの程度維持されたかをフォローアップで検証すること、さらに特別支援学校の小学部や中学部など異なる学部の教員に対する効果を検討することが挙げられる。